

●特集——そだちの遅れにどう向き合うか  
III・そだちの遅れと生活支援

# 働く知的障害者と自立

はじめに

今日、障害者の福祉現場ではさかんに「自立」が叫ばれるようになってきている。知的障害をもつ人々に対する援助についても、そのような動きが急速に広まりつつある。

従来の保護を中心とした福祉援助ではなく、彼らの潜在的な能力を最大限生かしながら、社会の一員としてみんなと一緒に働き、生活することができるように援助しようというものである。

筆者は、主に知的障害者を雇用している特例子会社の顧問医として一〇年あまり関わってきた。

本稿ではそこでの経験をもとに、知的障害

## 小林隆児

東海大学健康科学部教授

をもつ人々にとって働くことがどのような体験となつて、日々生活しているのか、その中で彼らの受けてきた養育や教育がどのような影を落としているか、ある具体的な事例を交えながら考えてみよう。

### 特例子会社とは

これまで障害者の就労といえば、身体障害者とその主な対象であったが、一九八八年の障害者雇用促進に関わる法律の改正により、知的障害者も障害者の雇用率にカウントされるようになった。それが契機となつて、少しずつ知的障害者にも企業就労の道が切り開か

れるようになった。

国は企業に対して障害者を社員数の一・八％以上雇用しなければならぬと義務づけているが、企業の採算性や環境整備の問題などから、現在でもいまだ一・五％程度に留まっている。そのなかで知的障害者の雇用の場として大きな役割を演じてきたもののひとつに、特例子会社がある。特例子会社とは、本来個々の事業主が負うべき障害者の雇用の義務を、厚生労働省の定めるいくつかの要件を満たすことで、そこで雇用される障害者も、親会社の雇用率にカウントできる、という特例を受けることのできる子会社のことである。

### ある特例子会社の場合

筆者が関与している特例子会社A社は今からおよそ十年前設立され、同年特例子会社としての認可を受けている。

A社での仕事内容は、コピー機で有名な親会社の製品の保守・アフターサービスに関する多くの部品を包装し、サービスマンがスムーズにメインテナンスをすることができるようになることである。

包装量や表示などに間違いがあれば即品質不良となり、クレームがくる。しかも関連す

るサービス部品は二〇〇三〇万個も登録されていて、月間の包装処理量も五〇〇六〇万個の量に達している。

材質・形状は違わなければならない大きさの部品がかなり多いため、毎月ほぼ一定量で多数包装処理しなければならぬような部品については、自動包装装置を用いることによつて、経営的にも安定したペースが保てるように工夫されている。

社員は一六名の障害者、うち一五名が知的障害、残り一名は身体障害である。

### 当初の雇う側の不安と 知的障害者の成長

会社を設立した当初は、はたして知的障害者に仕事が勤まるであろうか、部品の入れ忘れはないか、不良品を出さないか、雇う側の不安は非常に強かった。彼らも最初はひとつの包装で精一杯の状態であった。

しかし、まもなくそれも当たり前のようになり、きちんとできるようになり、やがて一個詰めたものを二〇個詰める、一〇個詰めた袋を二〇袋箱に入れるというような上のレベルの包装もできるようになった。

数年後には、部品ごとの包装材料を準備することもできるようになっていった。

### 就労の場で大きな問題となること

仕事のミスに注意されると途端に混乱してしまう人が少なくない。このような混乱が生じると、それがさらに次の仕事のミスを誘発する。注意されたことと、自分が何をミスしたか、その因果関係を理解することが難しい人が少なくない。

さらに問題になるのが、仕事のミスを指摘されても、それを自分が間違えたわけとして認めない場合が少なくないことである。他人から注意される、叱られるということは、彼らにとつて全人格を否定されたように感じやすいのであろうか。

教育現場では、スパルタ教育は過去のものとなり、受容的で保護的な指導が主流を占めつつあるのではなからうか。そのような傾向が助長されると、自分というものが問われるという経験がどうしても乏しくなりがちである。しかし、幸い彼らも入社後次第に遅しくなつてきていることも事実である。

### 雇う側が彼らに期待すること

知的障害教育に携わる教師にとつて、教える子が大企業の特例子会社に就職するというこ

とは、なかなかうれしいことのように思われるが、教える側と雇う側とのあいだで、知的障害者に対して期待していることには大きなギャップがあるように思われる。

では雇う側が知的障害者に望むこととはどのようなことであろうか。

普通に生活できる力を身につけて欲しいということであつて、特殊な能力をもつことを特別に期待することはほとんどない。具体的には、八時間きちんと働けること、朝定時に起床し、夜もきちんと就寝するなど、規則的な生活を送ることができると、何でも食べられること（偏食がないこと）、整理整頓、身なりを整えられること。これらは日常生活の基本的な事柄である。知的障害は軽度であっても、このような基本が身に付いていない社員は長続きしないし、会社の同僚との関係もうまくいかず、孤立しがちである。

先ほども述べたことであるが、自分がミスをして、自分からやつたと素直に報告できること。注意されること、叱られることに対して、素直に受け止めることができること。ミスをしたこと自体ではなく、自分がミスをしたことを認めないことが長い目で見た際に大きな問題となるのである。

会社に通勤することができる、時間が守れる、準備がきちんとしてできる。身だしなみをよ

くし、清潔でいられること。不潔であると、周囲の同僚からくさいと言われて嫌われ、知的障害者仲間からも排除されてしまう。

特異な行動パターンを身につけないこと。作業を着替える際に、床一面に広げておかないと、着替えることができない社員がいる。そのため彼はいつも更衣室の多くのスペースを占領してしまうために、同僚から煙たがられている。このようにステレオタイプな行動パターンを身につけている例では、職場で不適応を起こしやすい。

要はアパートで一人暮らしをしようする際に必要なことがら、会社でも求められているということである。

### 育てる側と雇う側のずれ

特殊な才能や優れた運動能力など、何かに秀でているということは、就労に対して大きな売りとなるように思いがちであるが、雇う側はこのようなことをほとんど要求しない。

職業訓練を行っている機関は、指導の中心を職業技能訓練に置き、何かある作業ができるようになることを目指している場合が多いように見受けられるが、雇う側からみると、それらの技能の大半は現実には役に立たない。会社で今求められていることに焦点を当

てた指導訓練が行われていないことがあまりにも多すぎる。極端な例では、かつてはハンダ付け作業を延々と教えているところもあつたが、そんな技能を要求する会社は今やどこにもない。

### 家族をみて感じることに

家族がひとりでも子どもを守ろうとする態度が強い。これは親のエゴにも通じるところである。子どもが知的障害をもつということは親にとつてもなかなか受け入れがたいことで、とりわけ知的障害が軽度あるいは境界域にある場合には、いつか正常にという夢が容易に捨てがたく、いつまでも子どもに過剰な期待を強いやすい。

家族全員が社会から孤立しないように、互いに支え合うような関係を日頃から志向することが大切である。

### ある事例から

B男、二〇歳代(事例の匿名性を考慮して一部事実を改変している)。

歩き始めが二歳少し前、ことばは三歳をすぎるまで出なかった。特に身のこなしの不器用さが目立っていた。そのため学校でもいじ

めの対象となった。幼児期から電車を眺めることが好きで、小学校(普通学級)に入ると、模型作りに熱中。授業も無視して工作をしていることもあるほどだった。

小学校高学年に入るといじめはますますエスカレートし、校内にある特殊学級に頻回に逃げ込むようになった。学校で彼が安心して過ごせる所はほとんどなかったが、家庭でも両親から勉強について繰り返し注意されていた。

六年生になると、とうとう不登校状態になり、家出までするようになった。当時、受診したいいくつかの病院では、ADHD、広汎性発達障害などと診断され、薬物療法を受けたが、短期間でやめた。

中学校に入ってまもなく、特殊学級に入つたことで、やっと落ち着いてきた。しかし、体力も集中力も乏しいため、学校の作業や実習に取り組んでも長続きしなかった。この頃から次第に自分に都合の悪いことや不利になることを話さなくなり、作り話を言つては自分の嫌なことを回避する傾向が見られ始めた。

中学校卒業後、すぐに知的障害者を雇用している某会社に就職した。しかし、その会社は倒産し、しばらく失業状態が続いた

一八歳、職業センターで知的障害(境界

監修=岡崎祐士 | 青木省三 | 宮岡 等

# こころの科学 115

HUMAN MIND

May 5・2004

好評発売中 1143円+税

[特別企画]

## 精神科受診

岡崎祐士/編

精神科の敷居は低くなったか

—精神科受診と「治療文化」の変容

江口重幸

早期受診の効用—うつ病と自殺の関連

島 悟・佐藤恵美・廣田靖子

身体疾患と精神科受診 加藤雅志・保坂 隆

ネットワーク時代の精神科医療 田村 毅

精神科病院の風景 花輪昭太郎

精神科クリニックの風景 功刀 弘

治療の中断 福田正人・赤田卓志朗・岡崎祐士

精神科受診の期間と費用 松原三郎

精神科受診を勧める際の難しさ 野坂達志

精神科受診を家族が考えるとき

中村光子・中井和代

精神科受診を本人が考えるとき

取材・文 塚田真紀子

受診しない精神疾患患者 春日武彦

精神科セカンドオピニオン 長尾圭造・界外啓行

●巻頭に—ストレスの布さ 岡崎祐士

●論説

リストカットをどうみるか? 林 直樹

●連載

カウンセリング原論 菅野泰蔵

鑑定医の事件簿 風祭 元

スクリーン精神医学 高橋祥友

日常性の心理療法 大山泰宏

子どものための小さな援助論 鈴木啓嗣

●ほんとの対話

●こころの現場から

質 問 (高等学校) 夏木 智

嗚呼ボランティア (食の風景) 吉長三恵子

www.nippyo.co.jp/

日本評論社

域、IQ八〇前後)の判定を受け、ハローワークの紹介で特例子会社A社に入社した。最初の数年間は慣れない仕事にも熱心に取り組む、彼なりに徐々には仕事もこなせるようになってきた。それでも効率化は他の社員と比較すると多少劣っていた。彼が悩みを筆者に話すようになったのは、仕事にも落ち着きを見せ始めていた頃であった。社員とうまくつきあえないという。仕事をやっている時が一番充実しているの、日曜日休んでいるより仕事場に行ったほうが楽だとまで言うのであった。彼はもともと何でもしつかりやらないといけないという思いが人一倍強いのが印象的であったが、そのよう

な思いはますます強まっていた。仲間の前でもつい理想的なことを言ったり、立派なことを言ったり、仲間を論じたりすることが多く、そのため仲間から浮いてしまふ、好きな女性にも本音でつき合えない。そんな苦しみで日々悶々としていた。仲間は自分に他人の悪口を盛んに話すが、人の悪口をいう人間は許せない、だから一人になりたい。いつまでも親に頼ってはられない、早く独り立ちしないといけない、何か資格を取りたい、親が亡くなった後のことを考えると不安になるなどと訴え、夜も眠れなくなってきた。睡眠誘導剤を処方しながら様子を見ていた。将来への不安は続き、家計簿

をつけだしてから、好きなジュースも特売で買ってくるなど、儉約精神が一段と強まってきた。その後、親から離れて自立したいというところで、自宅通勤をやめて、職員寮に入った。数ヵ月後、夢にうなされて不眠がひどいようにだと寮の職員が彼を連れて受診した。彼の自立への志向はますます強まっていた。相手に少しでも弱いところを見せると、弱い人間だ、駄目な人間だと思われるから、自分の弱いところは見せられない。悩みや弱さを人に見せたくない。もし自分の弱さを知られたら、給料を減らされるという怖さがある。しかし、自分は愚かな人間で、他の人は秀才に

見えるなど、彼の劣等感は強まるばかりであった。

このような状態で、薬物療法にはあまり積極的でなかったが、この頃、彼がサラ金から八〇万円ほど借金して大変な状況にあることが寮の職員の報告でわかった。何に使ったか定かではなかったが、借入金と支払い利息はほぼ同額で、毎月利息のみを返済しているような状況であった。早速、家庭とも連絡を取って、彼の貯蓄から借金を全額返済することで事なきを終えた。

実は彼の貯金はかなりの額に達していたので、金の必要があれば貯金をおろせばよかったのであるが、いまだ貯金は親が管理していた。つまり、これほど自立志向が強い彼にあって、両親は彼の働いて稼いできた金を彼に管理させていなかったのである。

禁欲的な彼の欲求不満が高じて、何かに衝動的に金を使ったのであろうことは推測できたが、彼は自分の弱みは見せられないと思いつから何に使ったかは一切明らかにしなかった。

ただ、この件が発覚した際の両親の態度には非常に驚かされた。今回の件で教訓として欲しいこと、と題して彼に助言を延々と数枚の紙に記していた。その中には、「……してはならない」「人に甘えてはならない」など、

彼の教条的な態度をよりいっそう強めそうな文面で埋めつくされていた。最後には誓約書まで書かせていたのである。

彼にとつてこのような両親の反応はいつものことのように、怒りを両親に向けることはまったくなく、反省しきりの態度であった。職員が間に入ってこの問題は事なきを得たが、その後、彼は面接の中で、「仕事の満足感がない」「仕事内容が変わった」「仕事で一〇〇%こなさないと満足感が得られない」「自分が立てたノルマをこなせていない」「ノルマを低くしたら自分が自分でなくなってしまう。だから自分でわざと高いノルマを据えている」「自分の目標をもっているほうが自分の将来につながってゆくのではないかと思う」「目標がないと、ノルマがないと、自分が砂の上の城みたいに感じる」と弱々しい声で自分の気持ちを語っている。

毎日仕事をしていても、仲間と話しても、彼には充足感がほとんどないのである。自分に対する劣等感が非常に強いのは、幼児期からいつも兄（立派に自立している技術者）と比較され、しっかりしなさいと言われ続けてきたからだという。彼がいつも両親の期待に応えなくてはならないという強迫的な思いが、こうして作られていったのであろうことが推測されるのであった。

## 働く知的障害者と自立

B男の心理に端的に示されるように、「自立」ということばのもつ意味は、彼ら知的障害者にとつてなかなか厳しいものをもっている。とりわけ彼のような境界域の知能水準にあつては本人も周囲の者も普通になれる、努力すればやれるといった思いに駆られやすく、いきおい、彼らを鍛える方向に走りやすい。自分があるがままの姿は認めがたく、常に普通を目指して努力することによって、初めて彼らは自分の存在を認められているのである。

そのような養育と教育を受けてきたB男の今の姿を見るにつけ、われわれは「自立」や「働くこと」という美しい響きをもつことばの裏に潜む危うさにも思いをはせる必要があるように思う。

特例子会社A社の本間修氏に多くの助言を得た。厚くお礼申し上げる。